

研究所だより

第117号

平成28年 3月 25日発行

可児市教育委員会

可児市教育研究所

可児市下恵土 5166-1

TEL(0574)63-4841

e-mail : kyoikukenkkyu@city.kani.lg.jp



学校予防教育を

可児市小中学校長会長（旭小学校長） 大野 伴和

【グループアプローチとは】

構成的グループエンカウンター（SGE）やソーシャルスキルトレーニング（SST）、その他の様々なトレーニングの総称をグループアプローチと言います。

【グループアプローチの広がり】

旭小学校ではグループアプローチを実施し、Q・Uの結果等を良くしました。市内でも実施しておられる小中学校があります。最終的には、どの小中学校でもグループアプローチが位置付き、可児市のスタンダードになるとよいです。市内のどの学校に転任しても、よく似た方法が実践されていれば、先生方も安心できます。

【実践から分かった4つのこと】

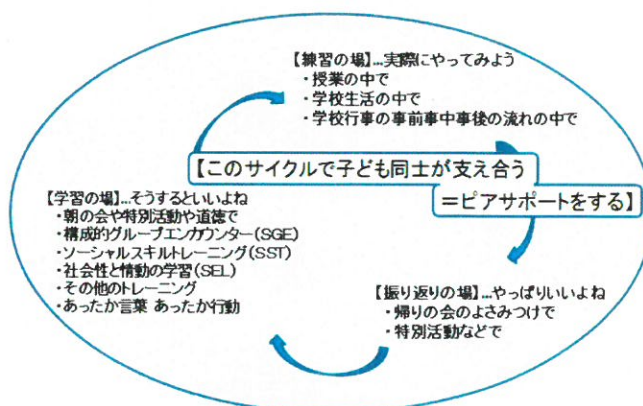
旭小学校で3年間、グループアプローチの導入の在り方を考えてきました。分かったことが四つあります。



【SSTの実施風景】

①他の学校でも同様な取組が行われていますが、本校の「あったか言葉とあったか行動」というのは、スキルの一つです。すなわち、トレーニングの対象です。②グループアプローチを実施しただけでは子供たちに定着しません。実施と同時にそれを生かす場を設定する必要があります。

③どの学校でも「よさみつけ」をしますが、先述の①や②を視点にした「よさみつけ」が効果を発揮します。④年間を通して、よさみつけの視点を高めていくことが学級の停滞を防ぎます。（単純なよさみつけ→①を視点としたもの→②を視点としたもの…のように年間の見直しをもって組み上げます。）



【学校予防教育を】

可児市には学校教育力向上事業があります。Q・UやNRTを実施して困り感のある子を把握し、その改善を図ります。結果として、過ごしやすく学びやすい学校を目指します。そのために、集団指導や個の指導の専門家からのアドバイスを受けます。

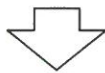
加えて、全ての学校で自校に合ったやり方で、グループアプローチの実施と定着を試みるのが大切です。これを学校予防教育と言います。

定着により子供たちのよりよい人間関係が進みます。よりよい人間関係は、いじめやトラブルを予防し、学力の向上をも支えます。

平成27年度 可児市学校教育力向上事業を振り返って

ねらい

「誰もが過ごしやすく学びやすい学校、学級をつくり、児童生徒の学力の向上を図る」



3つのキーワード

「ルール」…共通の行動規範、行動様式
「リレーション」…親和的な関係づくり
「ユニバーサルデザイン」…誰にでもわかりやすい

検証

NRT、全国・県学力調査
Q-U

研究

嘱託所員会

「支援を必要とする児童生徒に寄り添う教育支援のあり方～個別の教育支援計画・指導計画の活用を通して～」

27年度研修の重点
「特別支援教育」

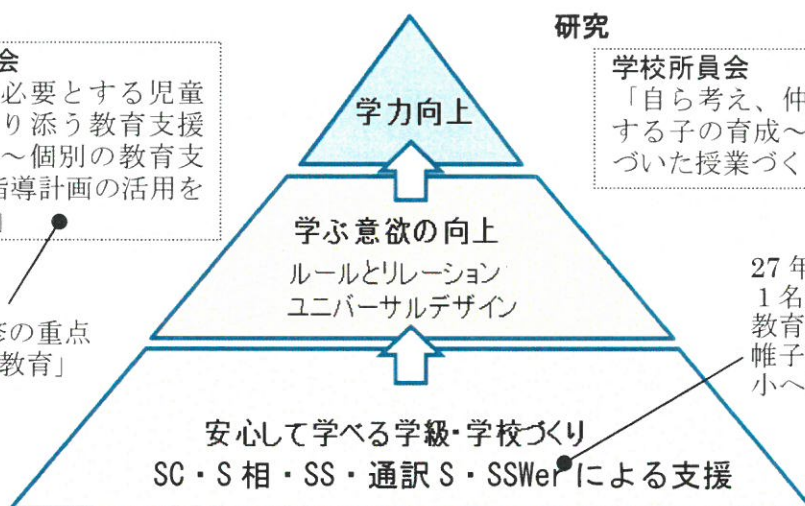
研究

学校所員会

「自ら考え、仲間と学び合い、表現する子の育成～協同学習の理念に基づいた授業づくりを通して～」

27年度より
1名増員
教育研究所より
帷子小と桜ヶ丘小へ派遣

4グループに分かれ授業研究



●教育講演会

「情報社会における生徒指導・授業づくり」藤川大祐教授（千葉大）

●特別支援教育連続講座（4回）

高井深雪先生（可茂特別支援学校）

●こども発達支援センターくれよんとの合同研修（スクールサポーター研修）

井川典克先生・中野たみ子先生・浅野和枝先生

●各小中学校オープン講座

「人権教育」「教科指導」「特別支援教育」など

講師：可茂教育事務所課長補佐・市人権啓発セ事務局長、市スクールカウンセラー他

●学校所員研修

研「協同学習の理念に基づいた授業づくりの実践について」

修 水谷 茂先生（日本協同教育学会会員）

●講師派遣（Q-U・命の教育・いじめ防止・ala）

Q-U：旭小・蘇南中 いじめ防止：広陵中

命の教育：桜ヶ丘小・中部中・西可児中・蘇南中

ala 学校おすすめプログラム：8小中学校

講師：可茂教育事務所課長補佐・市人権啓発セ事務局長、市スクールカウンセラー他

◇西山先生による巡回相談

年間200件を超える相談を行う

◇心の電話相談室（スマイリングルーム室長）

電話、来所による相談が400件以上

◇さまざまな組織

「小中支援担当者会」「SC協議会」「不登校対策委」「人権教育推進委」など

教育相談

教育支援

◇橋本教授（岐阜大）巡回指導

延べ19校、358名の児童生徒を相談

◇発達と教育の相談会（5月～3月の毎月1回）

約30件の相談を3名の医師など専門家が行う

◇スマイリングルーム

学習・体験活動、創作活動・表現活動
運動・レクリエーションなど

平成27年度 嘱託所員会

**支援を必要とする児童生徒に寄り添う教育支援のあり方
～個別の教育支援計画・指導計画の活用を通して～**

1 はじめに

可児市では近年、特別支援学級在籍児童生徒数が増えている。特に『自閉症・情緒障がい特別支援学級』に在籍する子どもが増えており、それとともに通級指導教室利用者も増えている。通常学級の中で過ごすことが難しくなっている子ども（情緒面で安定できない子ども）の増加も懸念されている。

そこで、平成27年度の嘱託所員会では「支援を必要とする児童生徒に寄り添う教育支援のあり方」というテーマを設け、個別の教育支援計画・指導計画の改良と活用について調査研究を行うこととした。個別の教育支援計画・指導計画への理解が深まり、困り感をもつ児童生徒への支援の広がりを願ってのことである。

2 嘱託所員会の活動

【第1回】 5月22日（金）＜見通し＞

○嘱託所員の委嘱を行う。

○個別の教育支援計画・個別の指導計画の作成上の課題やより有効な活用をめざして調査研究を進める。

【第2回】 6月24日（水）＜講話＞

「支援を必要とする児童・生徒に寄り添う教育支援の在り方」

可茂教育事務所 真鍋 淳 課長補佐

○個別の教育支援計画、個別の指導計画の書き方や活用に関して学ぶことができた。

○障害者差別解消法の施行に関して、法律の趣旨や学校での対応と支援計画との関わりを学んだ。

【第3回】 8月20日（木）＜講演＞

「個別の教育支援計画・個別の指導計画の活用に関する実践」

白川町立白川小学校 武市 由紀子 教頭

○個別の教育支援計画の活用について、具体的な

事例をもとに、長期的な支援のあり方の実践を学ぶことができた。

【第4回】 10月22日（木）＜協議＞

【第5回】 12月 9日（水）＜協議＞

○長期的な目標や支援の手立て、他機関との連携がよりわかりやすい個別の教育支援計画のあり方について協議する。

○通常学級在籍児童生徒のための個別の教育支援計画・個別の指導計画の様式について、支援を明確にした活用のしやすさ、通常学級担任の作成のしやすさ等を考慮して検討する。

【第6回】 2月10日（水）＜まとめ＞

○新様式の最終確認を行う。

○通常学級用の個別の教育支援計画についての作成基準を確認する。

○個別の教育支援計画の確実な引き継ぎに関する確認を行う。

3 成果と課題

◇個別の教育支援計画・指導計画の見直しを行うことで、本人や保護者とともに作成し、見直していける様式を整えることができた。

◇障害者差別解消法について、学校における「合理的配慮」のあり方について学ぶことができた。

◇通常学級在籍児童生徒の個別の教育支援計画・指導計画の様式が整い、次年度以降の記入・活用に向けての準備を整えることができた。

◆通常学級担任が特別支援教育や障害者差別解消法への理解を深め、通常学級在籍児童生徒の個別の教育支援計画・指導計画の作成が進むよう働きかけを行う。

◆個別の教育支援計画・指導計画の作成とともに個に応じた支援の手立てについて学び、広めていく必要がある。

平成 27 年度 可児市学校所員会 研究実践報告

平成 27 年度学校所員会の研究実践について紹介します。

1 学校所員の研究テーマ

「自ら考え、仲間と学び合い、表現する子の育成」

2 研究内容

「協同学習の理念に基づいた学習活動の工夫」により授業の改善を図りました。具体的には、①学習課題、②集団活用、③課題追究、④振り返りの仕方について工夫し、実践しました。

3 実践の状況

(1) 「協同学習」についての研修

8月6日 学校所員研修会

演題「協同学習を体験する～算数科の模擬授業を通して～」

講師 水谷茂先生（大山市立羽黒小学校教諭）

(2) グループ別研究授業・授業研究会

9月25日 蘇南中学校（社会科）

10月14日 今渡南小学校（国語科）

10月21日 土田小学校（算数科）

10月27日 旭小学校（算数科）

11月11日 東可児中学校（社会科）

11月17日 帷子小学校（国語科）

11月18日 桜ヶ丘小学校（算数科）

12月15日 兼山小学校（道徳）



国語の授業の様子（今渡南小）

4 成果と課題

協同学習の原理について研修を行ったことで、全ての児童生徒の意欲的で主体的な学びを生み出すための授業をめざした

研究実践に取り組むことができました。

具体的な手立てにおける成果(○)と課題(●)を以下に紹介します。

【研究内容①】学習課題の工夫について

- 単元を貫く課題や単元の出口を明確に示すことで、目標を持たせ、単位時間の位置づけを理解して取り組むことができた。
- 具体物を用いて、視覚的にわかる提示をしたことで、問題や課題をより明確にとらえることができ、追究意欲を高めることができた。

【研究内容②】集団活用の工夫について

- Q-Uや児童生徒の特性を考慮した教科専用、単元専用の小集団を編成したことで、良好な人間関係の中で、意欲的に課題追究に臨む姿が生まれた。
- 一人ひとりが役割を持つことで、全員が参加して教え合ったり、考えを深めたり、関わり合いながら話し合いを進める姿が生まれた。
- 小集団学習ありきで授業を組んだり、小集団学習を取り入れる目的やタイミングなどを考えたりするなど、協同学習の捉え直しが必要である。

【研究内容③】課題追究の仕方について

- 「ヒントカード」や基礎的・基本的内容の掲示を用意したことで、個に応じた追究をすることができ、一人一人が自分の考えをもつことができた。
- キーワードを設定することで交流を焦点化させ、効率よく話し合いが進められ、課題追究につながった。

【研究内容④】振り返りの工夫について

- 虫食いのまとめを作っておいたり、児童生徒がまとめをイメージできるようにキーワードや例を示したりすることで、自分の言葉でまとめることができた。

紙面の都合上一部しか紹介できませんでした。詳細は「研究紀要」をご覧ください。熱心な所員の先生方のご協力により、実り多い研究となりました。深く感謝いたします。

「分かる」授業をめざして

初任者の声「ちょうやるきたいよう」のように

可児市立広見小学校 濱田 歩

可児市立南帷子小学校 福富 泰地



初任の1年間は、社会人経験、講師経験などをフル活用しながら、1人でも多くの子どもが「分かった」と思える授業をするために様々な指導方法を学び、試行錯誤の連続でした。

まず、学習環境を整えたり、学習マナーの徹底を図ったりすることから始めました。特に、8つの学習マナーにこだわりました。授業開始と終了時は机列を整え、背筋が伸びた姿勢で全員が声を出す「学年で1番の挨拶」、指示したことを終えたら鉛筆を置き、よい姿勢のまま友だちの終了を待つ「姿勢ねばり」、友だちの意見につなげて自分の意見を発表する「付け足し発表」など、年間を通してこだわり続けることで、クラスのマナーとして定着し、学習内容の習得に役立ったと実感しています。

つぎに、発問、指示の吟味です。1学期は、一度の指示が多すぎたり、発問があいまいだったりして、何をするか分からずに子どもたちが戸惑う様子が見られました。師範授業、公開授業などで学んだ先生方の細やかな指導をまねることで、子どもたちが教科ごとの授業の流れを理解し、自分の考えを持って挙手をする姿が徐々に増えてきたように感じています。

また、教材研究の重要性も実感しました。指導内容だけでなく、想定される子どもの反応を洗い出し、指導方法を具体化する必要性を学びました。事前・事中・事後のつながりを大切にしたい子ども理解を指導援助に生かしたり、一人一人を確実に見届けたりすることで、子どもたちの学びは確実に深まりました。

来年度からも、今年度の手ごたえを生かし、「分かる」授業を目指して精進していきます。

末文ながら、1年間温かくご指導くださった先生方、一緒に学び成長した子どもたちに心から感謝します。ありがとうございました。



4月、2年1組の子ども達と初めて出会った時、その笑顔の眩しさと、自分自身の思いを込めて「君たちには太陽のような子になって欲しい。」と子ども達に伝えました。そして2年1組をどんなクラスにしたいか尋ねると、

「何でも【ちょう】せんする」クラスにしたい

「【や】さしい」クラスにしたい

「【ル】ールや決まりを守れる」クラスにしたい

「げん【き】いっぱい」なクラスにしたい

と子ども達は答えました。この、新たなる1年の最初に抱いた4つの願いを1年間忘れず大切に続けられるようにするために、なんとか一つの言葉にしました。ようやくできた学級目標が「ちょうやるきたいよう」でした。子ども達は、とても気に入りました。

学級目標に込めた願いを叶えるために、子ども達は、たくさんすることに挑戦しました。「授業の準備を休み時間に済ませられるようにしたい」、「授業ではどんな時も元気よく、はいっ！と声を出して手を挙げたい」、苦手だったことを願いに変えて、一つ一つ乗り越えていきました。そして、願いを一つ叶えた時には「たいよう賞」と名付けてみんなで喜び合いました。日に日に増えていく「たいよう賞」は、いつしか子ども達の誇りになっていきました。

クラスの中で問題が起きた時も「ちょうやるきたいようにふさわしくなりたい」と願いに変えて乗り越えることができました。

子ども達が、同じ一つの方角を見て1年間がんばることができたのは、みんなの思いがこもった学級目標があったからだと思っています。子ども達にとって苦手なことでも、明るい雰囲気の中で願いにできれば力強く乗り越えられるのだということを、今年1年間を通して、子ども達から教わりました。

〈社会科〉 主体的に社会の形成に参画する生徒の育成

～「価値に関する認識」を形成する授業と

「事実に関する認識」を獲得する授業の実践～

可児市立蘇南中学校 教諭 今井 慎也

1. はじめに

岐阜県中学校社会科研究会（以下 岐中社）では一昨年度から「価値に関する認識」の形成という新しい考え方が示された。それを受け、社会科の目的と授業の魅力を追究し、実践をまとめたいと考えた。

2. 主題設定の理由

変化が激しく予測困難な現在の社会の中で「主体的に社会の形成に参画する力」の育成が必要である。よって、岐中社のすすめる授業を実践していくことでこれからの時代に必要な力を養うことを目指した。

3. 研究仮説

研究主題を解決するために以下のような仮説を立てた。

「価値に関する認識」を形成する授業と「事実に関する認識」を獲得する授業の関連を考え、3年間の見通しをもって社会科の授業を実践すれば、主体的に社会の形成に参画する生徒を育成することができる。

4. 研究内容

- (1)「価値に関する認識」を形成する授業づくり
 - ・教材開発と授業展開
- (2)「事実に関する認識」を獲得する授業づくり
 - ①単元間での認識の関連
 - ②「事実に関する認識」を深める授業づくり

5. 研究実践と考察

- (1)「価値に関する認識」を形成する授業づくり
 - ・教材開発と授業展開

岐中社の定義をふまえ「価値に関する認識」を形成する授業とは、何を大切にするかを考え、自分の立場を明確に「意思決定」したとき、何を大切にして判断したのかを問う授業であると考えた。

【実践1と考察1】

3年生 公民的分野

人権の尊重と日本国憲法「人権と共生社会」

道路建設による立ち退き問題を、今日的な課題

になるように、本校周辺の交通状況をもとに条件設定をして題材とした。学習課題は「Mさんと市の両者の主張をふまえ、合意に導こう」とした。Mさんたちの「個人の尊重」が優先されるべきか、もしくは市全体の利益が優先されるべきかを考え、判断する学習になっている。授業の終末部分では合意形成を試みた。

本時では生徒の考えた価値をうまく整理することができず、教師による価値の明確化が課題となった。実践1からは以下の3点が分かった。

- i 今日的な課題の設定は生徒の思考を活発にさせることに有効である。
- ii 価値を明確化する必要がある。
- iii 「主体的に社会の形成に参画する力」を育成するために終末を工夫する。異なる価値の対立が存在する授業では合意形成が有効である。

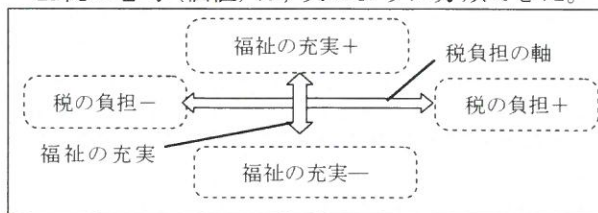
【実践2と考察2】

3年生 公民的分野

わたしたちの暮らしと経済「国民生活と福祉」

今日的な課題として、生徒が生活する可児市の財政を取り上げた。「少子高齢化の進む可児市で、27年度の歳入と歳出はどうすべきか」という課題を立てて授業を行った。

生徒の思考(価値)は、次のように分類できた。



実践1と合わせて考えると、授業前段で「価値の明確化」、後段で「論点の明確化」を行うとよいことが分かった。「価値に関する認識」を形成する授業を作る際のポイントを次のようにまとめた。

- i 題材は社会の今日的な課題であること。(条件設定を含む)
- ii 価値の明確化を図ること。
(授業前段：題材固有の価値)

- iii 論点の明確化を図ること。
(授業後段：社会に汎用性の高い概念的価値)
- iv 自分の思考過程をまとめること。
- v 終末部の明確化を図ること。(合意形成を目指すものか、立場の決定を目指すものか)

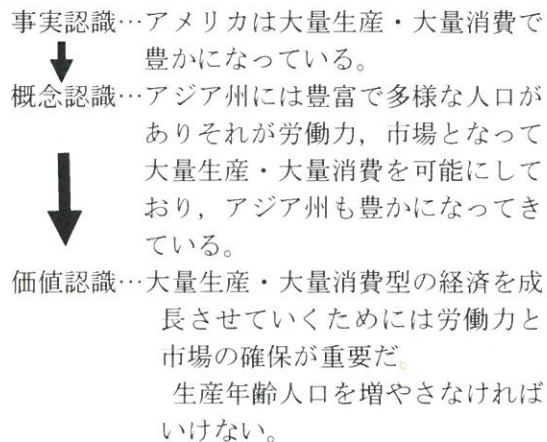
(2)「事実に関する認識」を獲得する授業づくり

①単元間での認識の関連

【実践3と考察3】

1年生 地理的分野
「世界の諸地域」(各地域を単元とする)

単元間での認識の関連によって「事実に関する認識」が深くなり、「価値に関する認識」の形成へとつながっていくことを考え、南米、北米、ヨーロッパ、アジア、オセアニア、アフリカの順で実践しようと考えた。「事実に関する認識」が、いかに「価値に関する認識」へとつながっていくかを産業に関する認識を例に、以下のようにまとめた。



②「事実に関する認識」を深める授業づくり

【実践4と考察4】

1年生 地理的分野
世界の諸地域「アジア州」

地域的特色を「豊富で多様な人口」ととらえイオンのASEAN地域への進出を象徴的な事象として、授業をつくっていった。

実践4で行った授業づくりのポイントを整理すると以下ようになった。

- i 地域的特色を明確にしているか。また地域的特色を象徴的に表す題材を選んでいるか。
- ii 単元全体と中心となる授業での思考過程(生徒の思考の変容)は明確か。

- iii 単元内、単元間で身につけた認識が活用されているか。
- iv 獲得した認識は生徒の今後の学習や社会参画に必要性のあるものか。
- v 単元全体と中心となる授業において論点の明確化(深め)はされているか。

授業展開の中での手立てについては、以下の4観点で検証していくと良いと考えた。

- i 学習のねらいが達成できるか。
- ii 生徒の思考過程に沿っているか。(=行き詰まりを含めて生徒にとって親密な事象か)
- iii 生徒の学習意欲を喚起できるか。(=新鮮味のあるものか)
- iv 全生徒が前提となる認識をもっているか。

6. 成果と課題

成果

研究内容1について

- ・「価値に関する認識」を形成する授業の教材研究のポイントを明らかにすることができた。

研究内容2について

- ・「価値に関する認識」の形成に向けて1, 2年時でどのような「事実に関する認識」を獲得させていくべきかが明確になった。
- ・授業づくりのポイントや検証の観点を明らかにすることができた。
- ・小集団の形態と全体交流との役割分担がはっきりした。

課題

研究内容1について

- ・板書や授業展開の終末部の工夫をする。
- ・汎用性の高い価値の検討を行う。

研究内容2について

- ・歴史的分野での実践を重ねる。
- ・小集団ごとの学習の差を解消するとともに学習した内容を個々に返す時間の確保が必要である。

平成 27 年度可児市教育実践論文応募のまとめ

◇応募状況について

地区	校種	職務別・年代別・性別									領 域 別 (論文数)																			総計 (編)			
		教諭	小計	20代	30代	40代	小計	男性	女性	小計	教 科										小計	道徳	特別活動	総合学習	外国語活動	学級経営	生徒指導	特別支援	健康安全		管理経営	その他	小計
											国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図美	技家	保健	英語													
可児市	小	28	28	24	2	2	28	12	16	28	4	3	5	2					2		16	2	2		3	4					1	12	28
	中	25	25	14	8	3	25	11	14	25	2	3	2	1		2	1	1	2	6	20	1	1		2		1					5	25
	計	53	53	38	10	5	53	23	30	53	6	6	7	3	0	2	1	1	4	6	36	3	3	0	3	6	0	1	0	0	1	17	53

<優秀賞> 学番順

No.	学校名	氏 名	種別	領 域	研究テーマ
1	帷子小	渡邊 卓実	個人	体育	環境設定の在り方や仲間との関わり合いを通して、「できた」「記録が伸びた」を実感し、誰もが主体的・意欲的に参加できる体育授業の創造～第6学年陸上運動(ハードル走・走り幅跳び)の実践を通して～
2	旭小	小川 月菜	個人	学級経営	仲間とのかかわりの中でよりよい人間関係を築くことのできる児童の育成
3	旭小	野口 洋憲	個人	学級経営	よりよい人間関係を築くことができる学級集団の育成～グループアプローチを生かして～
4	広見小	久保 幸世	個人	理科	できる・分かる楽しさを実感できる理科学習～経験と理解がにつながる指導・援助のあり方～
5	蘇南中	今井 慎也	個人	社会	主体的に社会の形成に参画する生徒の育成～価値に関する認識を形成する授業と事実に関する認識を獲得する授業の実践～

<優良賞> 学番順

No.	学校名	氏 名	種別	領 域	研究テーマ
1	土田小	村瀬 真弓	個人	社会	地域教材を活用した歴史学習の展開のあり方～歴史大好き！土田が大好き！と言える子を育てる指導～
2	帷子小	加藤 健太	個人	国語	国語「読むこと」における自己肯定感や学習意欲を高める指導のあり方～小学校低学年におけるアクティブ・ラーニングへの挑戦を通して～
3	春里小	大野 篤司	個人	外国語活動	コミュニケーションに自信をもち、誰とでも関わる事ができる児童～Hi, friends! Lesson5 “What do you like?”の学習を通して
4	広見小	渡辺 英弘	個人	社会	「学び方」を身につけ、意欲的に取り組める社会科学習～学ぶ楽しさを味わえる社会科学習を目指して～
5	南帷子小	奥村 真由	個人	外国語活動	低学年の児童が英語を聞いたり話したりすることに興味をもち、英語を使って楽しみながらコミュニケーションを図ろうとする英語活動の在り方
6	蘇南中	藤本 紀和	個人	美術	美術教育の可能性を探る～美術科と特別活動を繋ぐ実践を通して～
7	蘇南中	山口章太郎	個人	社会	社会的事象の意味を意欲的に追究する生徒をめざして～基礎基本の確実な定着を核として～

◇平成27年度実践論文 審査講評より

- 授業づくりと集団づくりの両面から研究実践を進めている論文が多く、「どう学ぶか」という視点から小集団学習を効果的に位置づけたり、児童生徒がどう変容したかを実態だけでなく、Q-Uの結果分析も踏まえながら丁寧に検証している。
- 「かっこいい英語プログラム研究」など、学校全体で取り組んでいることに対して、自主的に取り組み、願いを強くもちながら魅力ある授業を展開している若手教員の存在が頼もしい限りである。
- 初任者教諭からの応募が、昨年度は3点、今年度は4点あった。昨年度同様、どの論文からも児童生徒に向けられる愛情に満ちたまなざしを感じた。何より果敢に挑戦する前向きな姿勢が素晴らしい。
- 全国的に注目されている「アクティブラーニング」に着目し、国語科において、児童による主体的・協同的な学びを追究するなど、教育の今日的な課題に向かって先進的に取り組む実践がみられた。
- SST等で児童が獲得したスキルを日常生活に汎用するというサイクルを繰り返す中で、新たな課題を見つけ、工夫・改善を加えていく手法を用いて、「よりよい人間関係を築く」ための一貫性のある取組からは学ぶ点が多かった。また、年間を通して行われた実践を構造的に1枚にまとめた補助資料からは、実践の全体像をわかりやすく理解することができる。
- Q-Uの結果分析をも踏まえた児童の実態から目指す子どもの姿を明らかにし、仮説をもとに、主題に迫るための方途や検証が丁寧に記述されている論文がある一方で、検証や考察についての記述がやや不十分な論文もあり、せっかくの実践が説得力に欠けてしまっている点が惜しかった。